

『陸奥日記』の東北旅行史的特徴

高橋 陽一

「松島の景すゞろにみまほしく」。『陸奥日記』上巻冒頭のこの一言が、小津久足の東北（奥羽）行脚の動機を端的に表している。わけもなく松島の景色がみたくなったという出立のシーンは、「松島の月先づ心にかゝりて」草庵を出た松尾芭蕉『おくのほそ道』の旅立ちの場面をも連想させる。

松島は、江戸時代前半の一七世紀には日本三景（「三処奇観」）の一つに数えられており、東北を代表する、全国的に知られた名所であった。江戸時代における松島への旅の記録は数多く残されているが、それらを分析すると、旅の行程は、①松島往復型 ②東北周回型 ③北海道往復型 ④江戸・上方旅行型 ⑤その他のおよそ五パターンに分類できる。①はその名の通り松島来訪を主目的とし、松島もしくは金華山を終点にUターンして帰路につく行程である。②は松島、および松島と並ぶ東北の名所であった平泉もしくは出羽三山をめぐる、東北を周回する行程、③は公務等で北海道（蝦夷地）に渡航する途中に松島に立ち寄る行程、④は東北地方を出立し、江戸見物や伊勢参宮の途中で松島に立ち寄る行程であり、⑤は松島から三陸沿岸をたどる行程などが該当する。『陸奥日記』の行程は①

に当てはまり、久足の松島への憧憬と年来の宿意を汲み取ることができよう。^①

松島往復型の旅は、儒学者・細井平洲（『おしまのとまや』）や若かりし頃の伊能忠敬（『奥州紀行』）も行っている。この旅は、『陸奥日記』のような紀行文（時に和歌を盛り込みながら旅先の詳しい状況、故事、著者の感懐を綴った自己表現の旅の記録）を著す知識人の旅に多くみられる一方、道中日記（簡潔で客観性の強い旅の記録）を著す庶民の旅にはほとんどみられない。自然景観や松尾芭蕉の足跡のみならず、歌枕や霊場といった古代以来の風景が積層した松島は、学者・歌人・僧侶といった雅文芸を享受する人々にとってまさに旅の聖地であった。

『陸奥日記』の内容的特徴と史料的价值は、久足の幅広い学問に裏打ちされた教養と、日常の営みである商いや非日常の旅といった豊かな人生経験によって養われた卓越した観察眼、そしてあるがままの感情の発露にあるといえるだろう。^② その久足が旅先の事物を評価する際に持ち出したのが、「俗」という指標であった。例えば、仙台では藩主伊達家の菩提寺である大年寺など「めでたきつくりぎ

まなる「寺社」について、それらは「俗人」の喜ぶ所で、自分の心にはかなわないため訪問しなかったと述べている。その一方で、松島に関しては、「甚寂莫たる地にして、俗気なし。よに名だかきところなれば、さぞ俗気あらん、とかねておもひしにたがひて、いと心にかねへるところなり」と、静寂で「俗気」がなく、想像と異なりとても心にかなう場所であると称賛している。

また、高所から松島を一望できる富山の「大仰寺」に登った際には、次のように綴っている。

絶景とよにいふ景の、俗にちかきたぐひにあらざ、真の絶景とは、これらをやいふべき…この山は幽邃にて、美景なれば十分といふべく、都とほき僻地の景は、おほかたすごくきびしきものなるに、いとをだやかに、花やかにして、都ちかき山のさまともいふべき趣あり

松島の眺望は僻地であるにもかかわらず険阻ではなく、穏やかさと華やかさを備え、都に近い自然景の風情もあるが、決して「俗」には染まっていない。これこそが「真の絶景」であると、久足は最大級の賛辞を松島に贈ったのである。山中の参道を登って寺の書院に辿り着き、眼前の眺望が一気に開けたその時、押し寄せてきた高揚感はいかばかりであっただろうか。

忌み嫌う「俗」な場所、すなわち過度に繁華であったり、大衆的な営みがみられる場所ではなく、かといって僻地にありがちな荒々しさが全面に出ることもなく、美麗で気品のある自然景を備え

た場所。久足にとって、松島は風景・雰囲気において絶妙なバランスを保った理想郷であった。

一方、いわゆる白河以北の東北に対する江戸時代人の認識が読み取れる点もまた、『陸奥日記』の特徴であろう。それは未知なる異界・異境としての東北認識であり、「はるけき陸奥」という上巻冒頭の表現にすでに滲んでいるが、帰路白河に至り、「はじめて辺鄙をはなれたるこゝち」がした久足が、旅を振り返って綴った次の一文にはつきりと表れている。

すべて国風、東夷のなごりありて、人にかたるとも、その境をみずしては、まことすまじきことどもおほし

「夷」とは、未開の異民族を指す言葉である。「国風」に「東夷のなごり」があるとは、古代の東北に暮らし、「蝦夷」と呼ばれ異端視されていた人々の慣習や風土がこの地方に残存しているということであろう。久足は、実際に現地を歩いてそれを体感したと強調しているのである。

こうした東北認識は、江戸幕府の巡見使に随行して東北・北海道をめぐった古川古松軒の『東遊雜記』（天明八年（一七八八））などにも露骨に表れており、江戸時代にはある程度一般化した認識であった^③。久足自身は、東北を未開性や野蛮さで塗り固めてはおらず、むしろ旅先ごとに異なる東北各地の地域性を子細に描写し、僻地や辺鄙な場所には好感を抱いてさえいる。だが、久足ほどの教養人であっても、（あるいはだからこそなのか）根底に境界や民族に

対する鋭敏な感覚を潜伏させていた点は押さえておく必要があるだろう。約一二万字におよぶ明快で細やかな記述で東北の実情を書き尽くした『陸奥日記』は、旅行史上の金字塔であるのみならず、江戸時代の東北地域史、さらには江戸時代人の精神史を探る上でのバブルといえるだろう。

注

- (1) 近世の松島旅行の具体的な分析については、拙著『近世旅行史の研究―信仰・観光の旅と旅先地域・温泉―』（清文堂出版、二〇一六年）を参照。
- (2) 『陸奥日記』の内容上の諸特徴について、詳しくは菱岡憲司『小津久足の文事』（ペリカン社、二〇一六年）第三章第五章『陸奥日記』を参照。
- (3) 東北に対する後進・未開・異境イメージの歴史的経緯については、河西英通『東北―つくられた異境』（中央公論新社、二〇〇一年）を参照。